



COVID-19と都市化

加藤 雪彦

東京医科大学八王子医療センター皮膚科教授

「先生、これまでよくやってくれたと思うけど、そろそろやめどきかなあと思うよ。少し動ける間に、いろいろやっておかなきゃならないこともあるし。いままでありがとうございました」

3rdラインの化学療法まで頑張ってきた、ステージIVの有棘細胞癌の患者さんだ。いまでも軽い農作業をしている農家の方だが、転移巣の増大を認め、遺伝子パネル検査も含めて、次の選択肢に悩んでいた。

「そうですか。〇〇さんがおっしゃるのでしたら、よくお考えになったうえのことと思います。それでは、緩和専門病院を紹介いたします」

ステージIVの悪性腫瘍に対する化学療法をどこで見切りをつけるかは、医師にとって判断がむずかしいが、患者さんにとっては人生で初めての経験であり、もっとむずかしい。しかし、農家の方はその判断が適切であるという印象を長年もっている。もしかしたら、気象、自然などと向き合って生きてこられたので、人間もその大きな自然の一部に過ぎないと実感できるからではないだろうか。一方、都市の人間は、自分は自然の一部であるという実感に乏しく、頭の中だけでプラスマイナスを考えがちである。そのためか、濃厚あるいは淡泊など、適度から

外れることもある。

都市化は先進国だけでなく地球規模で進んでおり、2050年にはヒトの7割、70億人が都市部に住むとされる。都市化に伴って急増してきたアトピー疾患も同じ勢いで増加すると予想される。アトピー疾患の1つ、アトピー性皮膚炎の治療は、2018年のデュピルマブの登場以降、急速な進歩を遂げた。われわれはその治療に大きな武器を得たが、あくまで抗炎症療法であって、根治療法ではない。

しかし、誰も予想しなかったできごとが都市化をわずかながら逆行させている。いま、神奈川県の大井町の住宅はたいへん人気で、空き家を求めるキャンセル待ちのリストは非常に長く、内見している間がないそうだ。COVID-19のパンデミックにより働き方が変わり、都心に通勤せず家で仕事をする機会が増えたため、都市部に住む理由が減り、海や山など自然豊かな鎌倉の人気の急上昇したせいだという。

COVID-19は、罹患した患者さんはもちろん、医療機関の通常診療への影響も非常に大きく、迷惑であることは間違いない。だが、COVID-19が人々の価値観を変えて、都市化が鈍ることによって、疾病構造がわずかでも変化した改善することを、せめて期待している。